

能登半島地震 2007032509:42 M6.9 震度 6 強 輪島

(総括)

25 日、この日は、早朝から出かけて、9時半頃に家に帰り、テレビのスイッチをつけて着替えをしていたとき、地震ニュースが飛び込んできた。「能登半島沖を震源とする M6.9、輪島震度 6 強」。JIA では、震度 6 弱で自動的に災害対策本部を立上げることになっていることから、早速、高野さんに電話連絡を入れ、JIA で 11 時半に合うこととした。朝飯を掻き込んで家を出た。ちょうど折りよく高野さんと JIA 会館前で出会い、早速 JIA 事務局から北陸に連絡をすることとして、構築中の防災ネットワークの名簿に目を通したが、北陸は空欄であった。そこで直接水野一郎支部長に電話をかけ、状況をお聞きすると、地元で現地災害対策本部の設置を要請し、JIA が全面バックアップする旨を伝えた。翌 26 日に 4 時に本部災害対策本部の会議を開くこととし緊急招集を掛けた。会議には、ほとんどのメンバーが集まり、既に出来ている災害対策始動マニュアルをどう生かすかの再確認の議論で、即応性を重視し少し分かりやすく A-4 一枚で表現することとし検討を重ねた。その結果を踏まえて要約された始動マニュアルを携えて 27 日に現地に入ること、翌 28 日には県庁に赴き、お見舞いをかね、JIA が災害支援協力する用意があることを表明に行くこととした。

(詳細)

- 25 日 中田、高野が JIA に集まり、今後の方針を立て、水野北陸支部長に連絡をとる。金沢に現地災害対策本部立上げを指導し、JIA 災害始動マニュアルを送る。現地打合せを段取る。(内容：高野レポート参照)
- 26 日 東京において JIA 災害対策本部会合
災害時 始動マニュアル(A-3)を見直して簡易始動マニュアル(A-4)を作成し翌日の合同会議に間に合わせる。
金沢に行くメンバーは、中田・大羽賀・高野
27 日夕刻、現地災害対策本部との合同会議を開くこと決定。
- 27 日 午後 6 時 北陸支部事務局で現地災害対策本部会議を開く
出席者東京本部 中田、大羽賀、高野
北陸支部 水野、西川、清水、野手、大畑、高屋、忠田
対策本部の組織図(別紙 H・P)

(会議の主な内容)

会員は仕事の関係で、いち早く現地に赴き、独自の調査を行っている。非木造の被害は少ないという。建物の周囲の地面がうねり、床には亀裂が入っている所もある。雑壁には、教科書とおりのせん断亀裂が入る被害が出ている。震源地に近い門前町が最も被害が多く、輪島・七尾はさほどの被害ではないという。又半島突端の被害は、ほとんどない。

会議の内容（意見の交換）

- ・ 対策本部を昨日立上げ、水野本部長はじめ役回りを決め動き出す。
- ・ まず、現状の把握と、今後の行動方針を検討した。
- ・ 支部会員から、それぞれ被災地に建つ建物の調査に入って得た被災地の状況の報告があった。
- ・ 輪島・門前町・穴水に被害が出ている。特に門前町がひどい、突端、七尾は被害は軽微。緒方、輪島より車で30分のところ瓦は散乱し 輪島は土壁や束石基礎のところ被害が出ている。輪島塗の棚が崩れている。
室内に入ると、ガチャガチャで、足の踏み場もない。
- ・ 応急危険度判定は、既に開始され、明日から2日間民間延べ60名（判定士派遣依頼は、建築士会、事務所協会、建設業協会にあり）を加え全棟調査に入る。
- ・ 七尾市から被害は軽微であるが、市民からの要請で、判定依頼が出ている。
住民から既に罹災証明やどう補修するか等の質問が出始め、県から市に対して相談窓口の設置要請をおこなった。
- ・ 被害地の中には、入っているが、風評を懸念して情報を押さえている町もあると聞く。
- ・ 学会調査：5班に別れ全数調査、穴水の金沢工大の寮を拠点に動き出す。JIAと組む用意はある。
- ・ 文化財がかなりやられている。
- ・ うさん臭いパトロールが出始めているという。まちでは、街頭のスピーカーで注意を促している。

- ・ 震度6以上の被害としては、予測の通り
- ・ 半島で災害区域が限定され被害実数が押さえられているように思える
- ・ 被害が出ているのは
 - 古くてがっしりしている民家の被害は、ほとんどなく軽微な被害
 - 戦後の店舗、車庫付きの建物に被害が目立つ
 - 土の入っている瓦屋根の家の被害が大きい
 - 文化財関係の建築が、被災している。
 - 土間に亀裂が入っている。
 - 非木造の建物の被害は少ない。
 - （EX,その中でも、小高い山の上の4階建ての総合病院、3階まで雑壁に教科書通りのせん断断亀裂が入る。
 - S造の平やの武道館は被害ほとんどない。
 - 能登の地盤は良くない。（珪藻土の産地であることが象徴するように土壌は悪い。）

地震動の方向は、南北に引き伸ばされ、東西に亀裂が入る
非木造の被害が少ない

会員作品で能登で唯一の免審建物 七尾消防署

揺れの感じは、震度3程度（地震計が取付けてあったと聞く,データが取れていればと期待したい）
、動いた量12cm（地面に動いた跡が残っている）。

翌日（3月28日）石川県庁

水野現地災害対策本部長はじめとして北陸支部の災害対策本部員と共に6名で、朝一番で石川県庁に赴き、お見舞いと、災害支援の連携協力の申し入れをした。

その折、JIA本部で作成した「災害時の初動マニュアル」で地震発生から被災地の問題が終息するまでのプロセスを説明し、現時点での状況A-4のマニュアルで示し、今後どのようなことが起きてくるか、その備えをどうするかなどのことを、今日までのJIAの活動実績を通して説明した。今は応急危険度判定に入り、2日後には終了予定、その後被災度判定の段階に進み、いずれ復興計画が立ち上がってくる。被災度判定は、家の中まで入ることもあるので、住民との信頼関係をつくる事が大事なことから、顔の見える町役場の職員が同行する必要性を説明した。

JIAは、独自に行動することはないこと。県や被災地の市町村の要請を受けて動くことを伝えた。その結果、「県から被災地に、JIAの支援体制について口添えする」ことを確認し、資料として、「中越地震の三島町全戸調査報告書」を県担当官に送ることとした。

ここで、中田は、東京に戻り、大羽賀さん/高野さんたちは、北陸支部会員の案内で能登半島の被災地の調査に出る。

一人飛行機の中で

能登半島地震と名前が決まった。

地元の建築家の話によると能登半島にはいくつもの谷があり、谷底に集落がある。そこが震度6クラスの地震が起こった。それも周期1秒程度の木造建築が共振しやすい地震である。どういう状況になっているのか心配である。しかも、高齢化が進み、次世代は都会に出て定住している。傷んだ村を復興するモチベーションをどう掴むか難しい課題がある。相談窓口にたったとき、「息子からこの際金沢に出てきたらといわれているんですけど、どうしたらいいんでしょう。」と問われたらどう答えるか 難問である。

地元北国新聞の災害報道の明るいのがかえって気になる。明るい表情のお年よりたちの写真が添えられて「初めの携帯心強く・体動かし表情和らく・ボランティアの動き出す」とあった。